

東京芸術劇場 社会共生セミナー

第7回 「社会と上演のクロスポイント～個と個が織りなすパフォーマンスの事例から～」

2023年2月21日（火）18:30～20:30

オンライン開催

登壇者 アオキ 裕キ(新人Hソケリッサ! 主宰)
アサダ ワタル(近畿大学文芸学部 教員)
飯山 ゆい(音遊びの会 代表)



参加者 70名

情報保障 手話通訳、UDトーク

趣旨説明（東京芸術劇場）

社会包摂を目指す芸術活動の枠組みには必ずしも入らない2つの団体の活動を取りあげ、あえてパフォーマンスという行為に特化して、そこに向かう考えや舞台上で表現されるものを通じて何が見えてくるかを、皆さんと一緒に考えたい。

第一部 活動紹介

●音遊びの会（飯山）

遊びの会(<http://otoasobi.main.jp/>)のメンバーは60人ほどで、17人は知的障害があり、その家族も活動を共にしている。知的障害のあるメンバーは主に活動を始めた2005年に子どもだった人たちで、今は便宜上Aメンバーと呼んでいる。対して、音楽家、ダンサー、美術の人、音楽療法士、アートマネージャーなどの参加者をBメンバーとしている。障害のない人がある人をケア・指導するというのではなく、それぞれが自分自身の活動としている。神戸大学の音楽療法や即興演奏の研究フィールドとしてスタートしたが、現在は大学を離れ、神戸市兵庫区の物件に家賃を払って、音楽団体として定期的にワークショップを実施している。年2回ほどの自主公演と、招きを受けると地方遠征を行っている。



既存の曲は使わず、フリー・インプロヴィゼーション（即興演奏）で進めている。60人での大バンドから、中編成のセッション、3人のユニット、ソロ演奏まで形態はさまざま。ダンスや演劇のような演目もあり多彩な内容。大体こんなことになるかなと、ある程度の予想をすることはあるが、基本的には、そのときに自然発生的に出てきたものをみんなでやる。演者と観客

の境が曖昧で、どの人が演者かわからないパフォーマンスもある。普段と変わらない鼻歌を歌う人がいれば、ライトの下で堂々としたパフォーマンスをやる人もいる。同時多発的な場面もある。

舞台を成り立たせる要素として、観客、照明、拍手などを意識している。17年間の活動で、見てくれる対象に向けたパフォーマーの意識を身につけた人もいる。観客を喜ばせる、ウケる表現を好む人もいる。一方、公演を意識しているかどうかわからないメンバーもいる。それらを舞台上でどう表現するかいつも考えているが、基本的には本人が表現したいこと、見せたいことをそのまま演目にしていく。特定の誰かと何かをしたいという動きをそのまま見せていくのがすごく面白い。私たちの舞台はほとんど演出を行わない。舞台上では、家族との関係でも普段と違うものが見られる。

ワークショップでは、氷の溶ける音を聴くとか、床に寝転がって身体を感じを味わうとか、音楽セッションだけでなくいろいろなことを行っている。持ち回りで進行を担いながら、なるべく風通しよく、みんなで相談しながら進めるということを心がけている。ブログで記録を公開している。ゲストのアーティストと共演する際は、互いに名前や個性を知ること自体が、セッションだと考えている。

基本にあるのは、「今ここにある音を聴く」「今ここにあるものを見る」ということ。何か目標になるものがあって、それに向かって過程を踏むということではなく、既にそこにあるものを、今、そこにいる人たちと共有するのがワークショップであり、それをそのまま舞台にのせていく。「面白がる」「やってみる」ことが、音遊びらしさ。



知的障害があっても言葉でのコミュニケーションが取れないメンバーと、どこまで進められるか、常に問いながらやっている。例えば、あるメンバーが絵を描きながら鼻歌を歌うが、これは普段家でもやっていることで、パフォーマンスという意識を持っているのではないかもしれない。私やメンバーとの関係性が根底にあって、一緒に楽しくやっている感覚がある。探りながら、確認しながらやっている。同時に、言葉でのやりとりも諦めないということを常に考えている。共に作るということを大切にして、誰がどのようにイニシアチブを取って進めるかのバランスを意識している。知的障害のあるメンバーの中にも「作る」ということに積極的になってきた人もいて、誰と誰が何をやったらいいとアイデアを出すようになった。そういうことをなるべく拾い上げていく。誰もがアイデアを出して、誰もがイニシアチブを取れる状態にある会でありたいと思っている。

●新人Hソケリッサ！（アオキ 裕キ）

自分は、東京でのバックダンサー、マスコミ、CMの振付など商業的な仕事を経てニューヨークに修業に行き、9・11同時多発テロに遭遇した。自分の生き方の浅はかさに気づき、衝撃を受けた。踊りや表現に対する表面的なことに価値を置き、内側にアプローチした踊りをしてこなかった。

たことに気づいて、東京に帰ったが、モラトリアムな状態が続いた。新宿駅でストリートミュージシャンに集まる人だかりの横に、お尻を半分出して寝ている路上生活者がいた。お尻を出して寝る、家を捨てるというのは自分とは真逆の感覚で、「その人の中にはどんな表現があるのだろう」「路上ミュージシャンの横にその人が立つと、どんな景色が生まれるのだろう」と引っかかるものがあり、一緒に踊りたいと思った。『ビッグイシュー』代表者の協力で路上生活の人たちにプレゼンする機会を得たが、全然伝わらず、踊りを見に来てもらうことにして、6人の前で即興的に踊った。「今、自分は自由に踊りました、皆さんの自由な踊りが見たいのです」と伝え、「やります」と言ってもらえて、2006年にソケリッサ(<https://sokerissa.net/>)の活動がスタートした。

路上生活では体を固めることが多いので、緩めることに時間をかけた。振付の形を提供したが、覚えてもすぐ忘れてしまう。動きがすごく不自由でどこにも、自由を生み出したいのに、何か不自由さを生み出しているような状況だった。しかし、「太陽を飲んでください」などの言葉を使うと、その人の身体に歴史があるし、自分で作る動きなので、忘れない。やりたい形が変わることもある。その人の生きる身体に即した動き、嘘のない動きがそこに現れた。それを組み合わせ、作品を作るようになった。



写真：高松英昭

2007年に新宿のシアターブラッツで初公演をした。サルが進化して人間になっていくというストーリーで作品を作ったが、この人がやりたいという格好を優先させることを意識した。2015年はシンガーソングライターの寺尾紗穂さんのツアーに同行させてもらい、日本全国を回った。2017年は屋外でのパフォーマンスを中心にしようということで、お寺など許可を得られる会場、やりやすい場所を探して、全15会場で行った。メンバーの出入りが自由な状態は変わらないが、新しい希望者もいて、現在は少し増えた。公共の場所はハードルが高く、難しさを実感した。路上生活の方たちを劇場に招待したが、隣に座っていた人たちは退出してしまい、劇場で自分たちのパフォーマンスを続けていくことの難しさを感じたこともある。アウトリーチワークショップは、2014年あたりからだんだんと依頼が増えている。

2020年から21年にかけて行ったツアーでは、現代美術家の渡辺篤さんのアトリエで、最初の



写真：岡本千尋

パフォーマンスを行った。第2回は横浜みなとみらいで。建物の大きさと身体の小ささの対比を見せたいと思い、日本丸の前で行った。上野公園では、トラックにスクリーンをつけ、ドキュメンタリー映画『ダンシングホームレス』を上映した。この映画は、日本中の方に見てもらいたい。横浜市役所アトリウムにもスクリーンがあるので、映画上映とトーク、パフォーマンスをすることができた。音を主体とした作品創作を行う現代美術家の西原尚さんに、パフォーマンスにも出してもらった。寿町の公演には、田口ランディさんがゲストとして来てくれた。渋谷の稲荷橋広場、東池袋中央公園と続いて、最終回は桜木町駅前で踊った。カーテンコールに加わる方が日を追って増え、最後はたくさんの方が一緒に踊って大団円となった。

屋外ならどこでもいいというわけではなく、ここで踊ったら他の路上生活の人たちも見erだろう、サラリーマンが見erだろうと、その反応を楽しみに、場所を決める。場所ごとに、作品の見え方も自分たちの感覚も大きく変わるので、変わっていく面白さから刺激を得ながら、公演を行っている。

第二部 対談

●はじめに

アサダ：音遊びの会には初期の頃に遊びに行ったり、2015年に10周年公演でゲストアーティストの一人として招いていただいたりした。新人Hソケリッサ！は今まで観るだけだった。アオキさんがソケリッサを立ち上げられた2005年頃は、大阪・西成区釜が崎エリアで活動するNPO法人ココルームのスタッフをしていた。天王寺動物園にたくさんのブルーシートの小屋が並び、橘安純（たちばな・やすずみ）さんという詩人が住んでいた。彼のポエトリーリーディングに僕が演奏をつけるみたいな形でライブハウスに出演したり、小屋に通って映像作品を作ったりしていたことなど、いろいろ思い出した。

今日は、二人の実践にどのような言葉を紡いでいけるか、ファシリテートさせていただく。お二人の実践事例の共通点として、1つ目に、作品の即興性が極めて高いこと、2つ目に、お寺や倉庫など日常の場所や屋外など多様な場でやること大切にしていること、3つ目に、メンバー個々の身体性や表現を信頼して、コミュニケーションしながら作っていることを感じた。

何点か質問をしていきたい。まず、作品の質の担保について。上演の現場を見ている方は、いろいろなところで起きている出来事に対して、五感をフルに活用させながら刺激を受けるので楽しめるが、動画ではカメラの角度でしか見られないし、音の環境もよくないので、何が起きているのかわからない。ここからここまでがパフォーマンスという境目も場合によっては受け取れない。とりわけ音遊びの会はそうかもしれない。パフォーマンスの質について、普段意識されていることがあるか。

●パフォーマンスの質 舞台の意識

飯山：私たちは作品という言葉を使ったことがほぼない。作らないということが前提にある。作品でもないものをどうやってステージにのせるかを日々試行錯誤している。1日目の公演は1時間半で終わったが、2日目は2時間半かかったことがある。普通の方からすると作品とは言えず、だいぶ問題があるのではないかと思うが、我々の中では許容範囲。上演時間が

1時間違うということを経容する覚悟はある。

アサダ： 上演時間が1時間ぶれることは、劇場の上演ではあまり考えられない。それはすごく面白い。先ほどの映像の殺陣シーンは、演奏というより、みんなで場を作っているという感じがした。観客も含めて、音などを口実に、そこで何かやってみるかのよう。その思いつきは、音遊びの会の障害のあるメンバーやゲストアーティストなど、いろいろな人が交じっていると。みんなでこれをやりたい、あれをやりたいと挙げたことをとりあえずやってみるという場を、観客も共犯者になって作っていく、そんな感じを受けた。

飯山： 誰かが何かを求めていけば、それに対して答えられたか、質はどうかという話になるが、ご指摘の通り、その場にあるものを、そのときの感覚も含めて何が起こるかわからない中で作っている。でも何も起こらないという状況にはならないし、何かは起こる。そこも含めて受け入れてみる、作ってみるということをお互いにやっている。

アサダ： 17年間で「何かが起こる可能性を高める」ような振る舞いはあったか。みんなのレベルは上がっているのか。作品という言葉を使うと、まるで意図通りに理想の形でやろうというふうになるかもしれないが、とにかくみんなで何かやってみよう、そこで何か面白いことが起きそうというときに、アイデアを出す、あるいはみんなの振る舞いが上がるといった変化は感じるか。

飯山： もちろんある。拍手や笑いなどのリアクション、人の支持に対して振る舞いをするメンバーもいる。17年の中でパフォーマーとしての振る舞いが増えていると思う。メンバー同士、「この場面だったらこの人が出てくるよね」というようにお互いに持っているものもある。その場で演技をすることで作品という形になる。発足当初の、お客さんの前で何かをするという前提を共有していなかった子どもの頃の状況とは全く違う。

アサダ： 音遊びの会では作品という言葉自体を使わないということだが、アオキさんにあえて同じ質問をしたい。作品、上演の質といったことをどのような形で意識しているか。

アオキ： 作ること、創造することが好きなので、作品として形にしたいという気持ちはいつもある。場所によっては、即興的に組み立てて、そこで生まれたもので上演する。メンバー一人一人のクオリティを形にするところからスタートして、その組み合わせで、一つの形になっているという面白さがある。大変なことだが、そこに自分は燃えるというか、喜びを感じている。

●パフォーマーとしての意識

アサダ： 作り込む、演出をしていくときに、アオキさんが言われたような人の身体の内史みたいなこと、しかも自分の何かを積み重ねていくような生き方だけでなく、ある種「持たない」「捨ててきた」、路上生活の方々の身体——それももちろん一人一人違うはずだが——が自由に発揮される形と、アオキさんのやりたい理想の間の塩梅を、どのようにとっているか。

アオキ： 自分はいろいろなものを抱え、捨てないように生きてきて、表面的な、格好つけた踊りをしてきた。メンバーは全く逆で、自分にはないものがあり、その対比がすごく大事だと思っている。近づこうとしたこともあったが、それはやはり面白くない。中途半端な形から踊りに入った自分の身体を逆に見せて、メンバーとの対比を観客に見てもらおう。どんな動きでも、見せ方、組み合わせ一つで、クオリティが広がる。路上生活という特別な区切りとし

てやるのではなく、他のダンスカンパニーと同じような感覚で、肩を並べて一つの芸術として社会に提供するということが面白いのではないか。メンバーもそのように感じている。

アサダ： 他の芸術と肩を並べて表現に自覚的になっていく、それを作り上げていくという意識がアオキさんの中にあるということだが、メンバーの方の中にも同じ意識が徐々に芽生えていったのか。

アオキ： メンバーが「踊って楽しかった」で終わるのではなく、飯山さんと同じように、観客の反応があり、拍手があり、そこに社会参加という意識が生まれ、自信というか、何かを持つような気持ちが生まれる。路上生活者のために一方的に何かをやってあげるということではなく、向こうからも返ってくる。メンバーもそれを求めている。その意味で、やり方は何でもいいのではないかと思っている。

アサダ： 今話を聞いて飯山さんにも伺いたい。音遊びの会は、何かのジャンルなどと比較して肩を並べてやっている、自分たちも人に向けて表現をしているという自覚が、とりわけ障害のある方には多いのか、人によってそのばらつきはあるのか。

飯山： その点は確認するのが難しい。知的障害のあるメンバーに舞台の感想を尋ねると、「太鼓を叩きました」とか「よかったです」くらいの答えの人もいれば、「私はもうスターですから」「サインしましょうか?」と言う人もいる。言葉で表現できないメンバーにも似たような感覚を持っていると思われる人もいるが、全くまちまちで、皆がそうとは言えない。

アサダ： プレゼンテーションの中で絵を描きながら鼻歌を歌っている方の話があった。日常的にやっていることを、観客のいる舞台でも同じようにできるという場合、線引きはすごく難しいと思う。表現するという自覚を持っていない中で、コミュニケーションとして何かが生み出されている。それをあえて舞台に上げることについて、会全体で議論してきたか。

飯山： 関係性が確立されているので、お互いの感覚を出しながらやっている。鼻歌を歌っていた場面は公開の催しだったものの周囲に観客がいなかったもので、日常の彼に近い状態だった。彼のタイミングで歌い始めると、私たちはマイクを差し出す。それがお客さんに共有される。本当に嫌だったらマイクを拒絶する。マイクに向かって言葉を発したり、マイクの前を通り過ぎながら話したりすることもある。1つ目の動画のギター、ドラム、サックス等のパフォーマンスでは、彼が急に一番前に飛び出して踊った。音楽に合っていると周囲に感じさせるような、非常にパフォーマンスに近い状態だった。彼自身がそれをみんなに見てほしいのか、見てほしくないのか、判断はできないが、彼と一緒にその状況を共有したという感じ。

●パフォーマンスとしての見せ方、見え方

アサダ： 観客からの拍手、照明、ボリュームの大きな音など、いつもとは違う環境の中で、周りに人がいることで、変化しているように感じた。日常的に彼がやっていることを他のメンバーが、「これが面白いんだよ」と観客に向かって支援していたのが面白い。そういうことがないと、ただ生々しい生活行為のみで場が満たされることになるだろう。それら全部を受け止めて楽しめる人もいるかもしれないが、「ここを見るんだ」と提案してもらうことで面白く見る、その見方がわかることもある。そうなれば作品としてはわかりやすくはなるが、飯山さんが本来考えられている「今ここにあるものを見る」「今ここにあるものを聴く」には、本来、観客にはもっと自主性が求められるのではと、一方で思った。ある種、ハードルの高い

ことだと思う。音遊びの会が活動を広げることによって、観客の自主性を育てている感覚はあるか。

飯山： その感覚はある。常に周りを見回して、何が起きているのか掴まなくてはならない。工場でのパフォーマンスのスタイルにはすごく可能性を感じたが、劇場の舞台と比べて観客にとっては難しいかもしれない。数としては普通の劇場でやることが多い。劇場の舞台では、同時多発的に起きているたくさんの中からの、照明やマイクで切り取って見せるので、ある程度の見やすさが作れる。初心者向きということかもしれないが、必要と思っている。

アサダ： ソケリッサのメンバーには、舞台に立つ人としての感覚の違いがあるのではないか。突然、「明日は病院に行くから（公演に出ない）」のように、我々から見ると自由すぎるものが時々出てくる。全く違う世界に生きているような感じ。舞台人としてはご法度だが、そもそもその枠の違う人たちと一緒に舞台を作っているからこそ難しさが生まれ、また、既定の表現を超えていける可能性もあるのかもしれない。その辺の感覚を教えてください。

アオキ： 稽古を重ねて本番1週間を切った頃に来なくなってしまった人は、江の島にイルカを見に行っていた。歯医者に行くからと稽古に来ない人もいる。最初は一般のカンパニーのように「遅れるのであれば電話をください」とか、「休むときはちゃんと理由を教えてください」とか言っていたが、自分はいわゆる転んでしまった人の踊りを見たいのに、別の転んだ人を作るようなことになってしまうのは違うなと思った。その人の身体、その人の感覚を見せたいのだから、何かを強制するのは違うと。基本的に僕は一言も言わず、本人たちに委ねている。ツアー中に、日常で嫌なことがあってしんどいからと抜けてしまう人もいる。他のメンバーがカバーしたり、お客さんにはわからない範囲で変えていくことを当たり前に行っている。こうしなきゃいけないとか、踊りってこうだとか、社会ってこうだとか、そういうことを壊してくれるメンバーたちは、逆に、見えない何かを見せてくれる。今の世の中で一つの需要になっていくのでないかと自分は思っている。

アサダ： アーティストや関係者は、ダンスでも踊りでも自由に芸術を作るということを求めているが、芸術の領域の中での自由になっていることに、その領域内にいるアーティスト自身は意外と気づかなかつたりする。また、一緒にやっているメンバーなど他者に対して求めていることが、社会の常識を反復してしまっていることもある。根本的なレベルで抜け落ちることが起きてしまうのかなと今思った。「何回無断で休んだら出演なしなどのルールはあるのでしょうか」という質問が来ているが、その答えは今ほとんどアオキさんがお話しになった。休んだら罰則といったルールが創作団体には生まれそうだが、その辺のことはより自覚的に自由になろうとしているのか。

アオキ： 来なかったメンバーの部分は自分がカバーしたり、即興的な部分を入れることで補ったりしている。逆に、一期一会というか、同じ作品でもメンバーの増減などで変わっていくことを見せる。必ずきちんとした形に戻そうとするのではなく、壊れたら壊れたものを見せる中で、自分もメンバーも懸命に形にしようとするところも、見え方として面白いと思う。

アサダ： 引き続きアオキさんに伺いたい。先ほど飯山さんが、劇場だと舞台があって、いちおう照明も当たり、見る側が表現を見に来ているモードになれると言われていた。路上生活の方とのパフォーマンスのツアーで、公共的な施設を借りるのはいろいろと物理的な制約もあって難しいという話だったが、あえて劇場的な場所で、客席と舞台があって、照明や音響な

どのシステムの中でやる表現と、それ以外の日常的にやっている各所での表現との間に、意識や作り方の違いがあるか。

アオキ： 自分が何の刺激を得られるかを大事にしている。劇場の公演には、自分たちを応援してくれている方や見たい方が集まり、その中で提供して、「最後までよくやり切った」と拍手をもらう。それはそれですごくありがたいことだが、屋外でやると、通り過ぎる人もいれば、さっき映像にあったように携帯を見ている人、ポケモン GO をやっている人もいる。自分たちの見え方にゾクゾクする部分、「ウォー」という感覚を得たい。屋外は、劇場では演出できないような環境も含めて、それを感じる部分が多くある。たくさん集まればいいということでもなく、通り過ぎる人がたくさんいていい。誰も見向きもしないところで踊るのは自分たちの一つの形だと思う。世の中のリアルと繋がりたいという思いが強いが、これは、コロナもあって、精神的にも物理的にも分断された身体をすごく感じているからだと思う。メンバーともがつんと掴み合いたいし、社会とも街とも繋がりたい、世の中とリアルに繋がりたいという感覚がある。

●演じる場所が持つ意味

アサダ： 今日のテーマは「社会と上演のクロスポイント」。東京芸術劇場のセミナーであるという文脈からも話していきたい。何かを作る、表現する、人に見せることの意味を遡って考えたとき、自由なように見えても、実はある仕組みの中で作品を作っているのではないかと、個人的な関心からずっと思ってきたし、今日の話からもそう思えた。だからこそ、より日常の生活の現場で起きるところに出ていく。美術館から、劇場から、コンサートホールから出ていく。もっと遡れば、ものを作るということ自体は、劇場やライブハウスの音響装置などを前提にするのでなく、もっと現象的なもので、作ったものをどうあてがっていかを考える。より遠くの多くの人に聞かせるために PA システムを使用するし、見やすくするために劇場を使う。そう考えていけば、劇場などの場所を使うことも、もっと生々しい現場で見せることも、どちらもできる。そういう感覚を屋外や日常的な場所でやること、あるいはもともと表現者という自覚を持ってやっているのではない人、例えば障害のある方や路上生活者と組んでやることによって、ある種の職業アーティストの表現感とか、創作感みたいなものがぶち壊されると思う。そのぶち壊された先にもう一度劇場というシステムで何かをすると考えたら、どんな面白いことができるか。

アオキ： CM やミュージックビデオの振付を長くやってきたが、そこでは資本主義の作り方、つまり、売るために、ダンスを決めダンサーを組んでという流れで作品ができていく。ソケリッサは、そういう作り方では絶対うまくいかない。形を決めてそこにメンバーをはめると、みんな死んでしまう。逆にメンバー個人の動きを生かして形にしていくのがソケリッサだと思っている。劇場はお客さんが入ってお金生まれることがメインの場だとすると、そこをとっぴらって考えていかないと、自分たちの新しいものは提言できない。その辺のハードルを理解してくれる環境であれば、面白いものが生まれるのではないかと強く思う。

飯山： 舞台では知的障害のあるメンバーとないメンバーがほぼ半々。その日に都合がつくメンバーが出演するというやり方。障害のないメンバーがなぜ参加するかというと刺激があるから。日常の自分の活動にはない、想像を超えた新しい刺激がある。もちろん、場所によって

生まれるものがあるって、劇場であろうが、屋外であろうが、その場に応じたその場所ならではの新しいものが生まれる可能性がある。どちらのほうがいいというような優劣は感じない。



右上より、アサダ、アオキ
下段、飯山

●活動に関わる人々の変化

アサダ： すごく理解できる。いくつか質問が来ている。先ほど、事前に作らないという話と、2日目は上演時間が1時間長くなったという話があったが、「パフォーマンスの方向性や段取りはあるか。本番中にスタッフがファシリテート（声かけや誘導など）をすることはあるか」という質問。スタッフの話が今まであまり出てこなかった。僕は勝手に、みんなが演者というイメージを持っていた。

飯山： 1時間も上演時間が変わるのはあまりよろしくないと思っている。大体2時間、演目は10個ぐらいで収めようとしている。動画の中で、1人の女性がずっと演奏していたが、彼女は終わらない人。開場時から演奏し続けられれば、いくらか彼女の意思に添える。そういった場所と時間の配分程度の段取りは、周りで見ている他のメンバーが考える。挙手制で「一番にやりたい人」と決める場合もある。何も段取りなしで舞台上で相談しながらやる場合もある。演奏者以外のスタッフはほぼ私くらい。私もたまに演奏する。楽器の準備や音楽的な環境を整えるミュージシャンも何人かいる。その人たちが知的障害のメンバーの誘導もする。次が順番だとわからない人もいるし、言葉でコミュニケーションを取らない分、今何をやりたいかを表現することが難しい人もいる。例えば、もぞもぞしている、前のめりになっているといった仕草を拾い上げて、パフォーマンスの中に入れ込むことを、メンバーやミュージシャンたちが一緒にやっている。

アサダ： 詳しく教えてもらって、イメージがしやすくなった。「どのように場が成立しているのか」と質問された方にも、具体的なイメージが見えたと思う。時間の関係で、次の質問を最後にする。「ホームレスの方々や知的障害の方々表現する場で、日常で変化があったことなど思い出に残るエピソードがあれば教えてほしい」。意図が異なるかもしれないが、メンバーと付き合い一緒に作ってきた飯山さんやアオキさんの日常の中にどのような変化があったかも、併せて答えてほしい。

飯山： 知的障害あるなしにかかわらず音遊びの会のメンバーは、活動があることで日々楽しいと思う。一緒に遠征や旅行に出かけるし、舞台が待っている。行けば仲間がいて、仲間と共にする場があるということ、お客さんがいて非日常があるということは、日常にとってよいこと、楽しいことだと思う。人生に活躍の場が一つ加わり、表現をする場を通して親密な繋がりができている。

私自身は、音遊びの会に参加して、どの人も面白いと感じるようになった。そういう視点が育まれている。面白くない人はいない。日々更新されている。1時間だけワークショップをした人と、翌日の舞台で共演する依頼を受けることがある。最近、どの人とでも舞台に出る自信はついた。

アオキ： 一番変化しているのは自分。得られるものが本当に多くて、勉強させてもらっている。何より路上生活と公言して人前に立つこと、自分と折り合いをつけながら継続してやってくれることはすごいことだと思う。その中で自分はどう進んでいくのか、変化していくことが必要なかを常に考えさせられた。メンバー自身も、着るものが洗練されてくるとか、歯がない人が歯を入れたとかいう変化がある。一緒に過ごして、生き生きしている姿を強く体感している。続けてきてよかったと感じている。

[劇場]： 多岐にわたる話を聞かせていただいた。形を決めるのではなくて、生きるあり方を作るということで、それを我々はどのように見るのか、また演じる方はどのように見られているのか、認識しているのか、していないのかというような話にもなった。劇場という制度の中での表現、野外での表現についてなど、いろいろと考える材料を頂くことができた。